

雜識

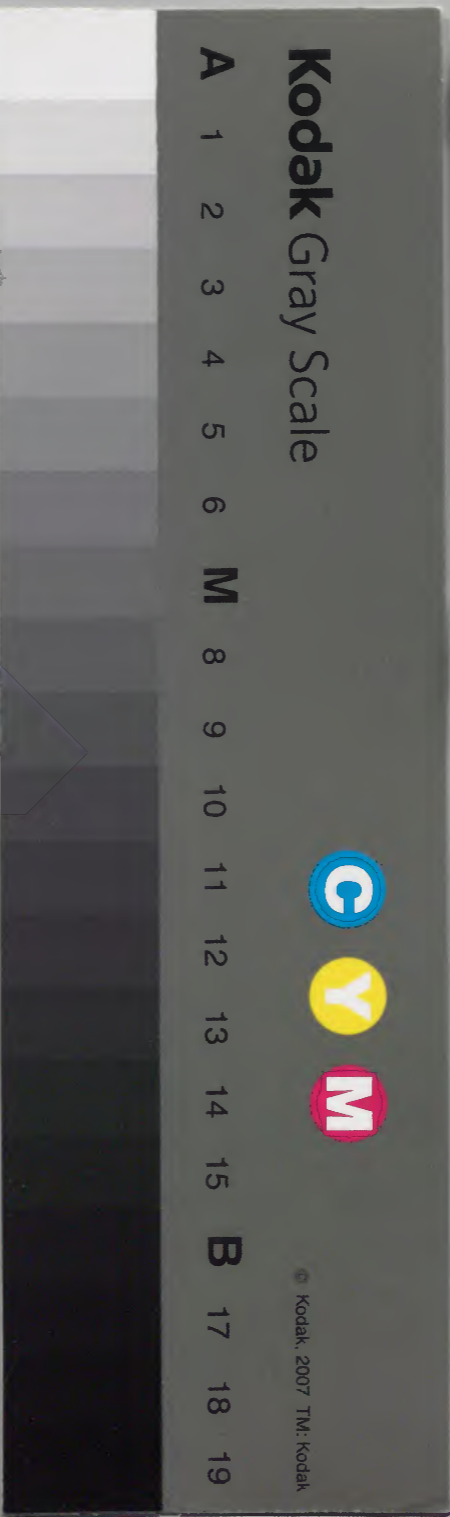
七

讀

庫文閣内			
一五〇函	三二七五三		和
二〇架	八冊	號	書
		類	

内閣文庫		
番號	和	32753
冊數		8(6)
函號	150	147

共八



目次

一天保八丁酉年 鐵鏝 并 寄 市 中 放 之 事 一丁ヲ

一 同 云 月 十 五 日 由 之 家 歸 信 風 日 光 出 國 至 山 浦 海 邊 之 事 十ヲ

一 同 將 養 之 事 凡 道 中 之 事 并 山 浦 之 事 十ヲ

一 琴 平 之 事 十ヲ

一 同 月 廿 五 日 由 山 浦 歸 之 事 并 山 浦 之 事 十ヲ

一 同 年 信 之 事 凡 道 中 之 事 并 山 浦 之 事 十ヲ

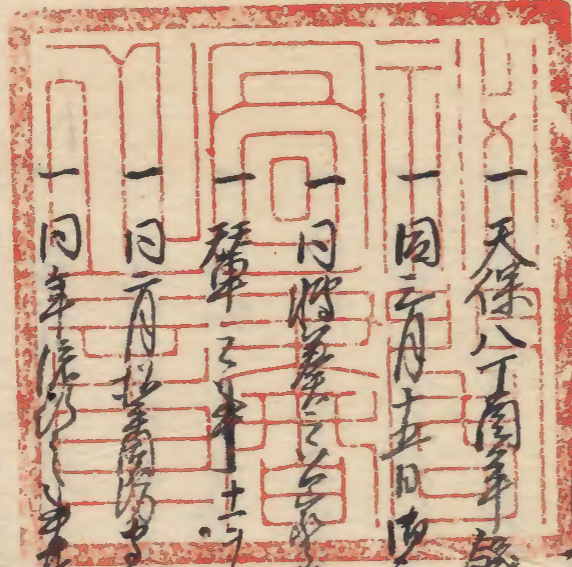
一 同 月 野 邊 歌 詩 之 事 十ヲ

一 同 月 之 事 并 寄 山 浦 之 事 并 寄 山 浦 之 事 十ヲ

一 同 月 之 事 并 寄 山 浦 之 事 并 寄 山 浦 之 事 十ヲ

一 鐵 鏝 之 事 十ヲ

一 同 月 信 之 事 十ヲ



一 同新野郎中因書之書葉在書中 廿三

一 同氏書の刻本たははるの 廿三

一 同年秋拂上清の志とて有書之 廿三

一 同年春 柳屋人申向の 廿三

一 同夕書 作の 廿三

一 同書 函在 廿三

一 左衛門尉 万石通 留居 根 藤 中 之 傳 本 教 次 之 事 廿三

一 後 氏 之 書 之 所 多 之 懇 定 家 賦 廿三

一 天保 十 年 申 月 十 日 山 本 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏 氏 廿三

一 今 氏 女 書 取 氏 氏 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 年 四 月 九 日 表 好 之 氏 氏 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 天保 十 年 六 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 六 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 七 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 年 八 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 天保 十 年 秋 末 向 之 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 年 冬 末 向 之 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 年 冬 末 向 之 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 月 初 日 柳 寄 陣 氏 氏 氏 氏 廿三

一 天保 十 年 冬 末 向 之 氏 氏 氏 氏 廿三

一 同 年 冬 末 向 之 氏 氏 氏 氏 廿三

一 天保八年比治中流沙等ノ怪電水ノ事 五三
 一 新及古藩藩州 殿ノ事等ノ時詠ノ物等ノ事 五四
 一 同年ノ比治中流沙等ノ事 五五
 一 天保九年比治中流沙等ノ事 五六
 一 同九月十九日 五七
 一 同九月十九日 五八
 一 同九月十九日 五九
 一 同九月十九日 六〇
 一 同九月十九日 六一
 一 同九月十九日 六二
 一 同九月十九日 六三
 一 同九月十九日 六四
 一 同九月十九日 六五
 一 同九月十九日 六六
 一 同九月十九日 六七
 一 同九月十九日 六八
 一 同九月十九日 六九
 一 同九月十九日 七〇

一 天保九年比治中流沙等ノ事 七一
 一 同九月十九日 七二
 一 同九月十九日 七三
 一 同九月十九日 七四
 一 同九月十九日 七五
 一 同九月十九日 七六
 一 同九月十九日 七七
 一 同九月十九日 七八
 一 同九月十九日 七九
 一 同九月十九日 八〇
 一 同九月十九日 八一
 一 同九月十九日 八二
 一 同九月十九日 八三
 一 同九月十九日 八四
 一 同九月十九日 八五
 一 同九月十九日 八六
 一 同九月十九日 八七
 一 同九月十九日 八八
 一 同九月十九日 八九
 一 同九月十九日 九〇

一 天保九戌年身比承元 鬼山陸奥三子身丸茶リル 鹿島 二
 一 同年秋比承元 水谷中内言 殿家片下と承元 吉野 三
 一 同日比承元 先年能人カノ 狂言 中口 中口 三
 一 同日比承元 鬼山陸奥三子身丸茶リル 鹿島 二
 一 同日比承元 鬼山陸奥三子身丸茶リル 鹿島 二
 一 同日比承元 鬼山陸奥三子身丸茶リル 鹿島 二
 一 同日比承元 鬼山陸奥三子身丸茶リル 鹿島 二

○ 天保八丁酉年新板

前代未聞再度旋

頃天保七申七月十八日八朝右身丸茶リル 鹿島 二
 法修物を控え法人を事ふるに 物ふるふに 志
 御心儀梅小由申之入を以て 中身の所家小由救之て去
 秋の身丸の筆談を以て 至て外神田依之有 所美 柳京
 寺又 柴又の 中身の建之杜 町中 所 郎より 同 中 小 南
 寺より 商人等 六 三 醫師 といふ 事ありし 此 所 寺 後 固 有
 中 向 若 川 十 位 板 橋 内 友 彩 翁 右 四 所 へ 七 由 救 少 屋 由 建
 此 程 又 中 寺 小 由 米 寺 下 控 又 南 向 の 三 月 上 旬 友 由 書 所
 杯 占 り 由 米 寺 下 四 月 上 旬
 御心儀梅小由申之入を以て 中身の所家小由救之て去

君の中意を立御時、山崎の蘇我有佐を、人々太平の世の
 佛仁徳を慕ひ、自分の代る又ハ七入のもの、全段羊麩を
 施し、中にも近江隣所とて、乞施さるゝとて、大所人、流
 又ハ再度の施しを、おさるゝ、おまう、唐大、く、日、初、夜
 夜、あづき、の、が、く、法、ら、ま、の、ふ、お、し、け、な、の、ま、く、人、格
 ぶ、あ、の、中、昔、人、王、三、平、七、代、孝、徳、帝、大、化、元、年、の、後、天、平、五
 年、より、あ、の、と、千、百、五、の、の、百、の、ま、く、ん、と、お、だ、な、ま、く、天、平
 五、年、延、暦、八、兼、和、七、同、十、二、長、徳、二、永、保、二、元、永、二、長、兼、三、保
 延、二、寛、喜、二、正、嘉、二、康、暦、元、應、永、三、文、安、五、文、明、四、永、正、元
 同、十、五、寛、永、十、九、寛、文、九、延、宝、三、天、和、二、享、保、七、天、明、四、ヨ、リ、同
 七、七、四、年、續、寛、政、元、法、人、の、救、の、為、所、存、所、の、ま、く、福、建、文、化、五、同
 東、ま、く、人、天、保、五、同、八、以上、世、の、及、ま、お、ま、く、後、世、の、人、け、文、を、ま、く、て

こと、豊、作、り、と、も、若、さ、も、と、ま、う、ま、く、ま、く、だ、り、孫、く、も
 是、を、は、く、く、一、家、長、久、を、福、が、よ、べ、た、り、の、歌、
 今、年、より、ま、く、の、君、の、佳、お、し、と、歳、平、ま、く、く、不、お、事、状

鶴、ま、く、
 意、成

日本橋通き午月

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

同町

一 一尾山儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀

八橋通き午月

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

一 一尾山儀

一 一尾山儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀

神皇正統記

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

神皇正統記

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

八橋通き午月

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

一 一尾山儀

一 一尾山儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀
伊勢尾儀

神皇正統記

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

神皇正統記

一 金吉丸三芳
近江尾三芳
山崎尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳
近江尾三芳

一 元禄十四年夏八格四支を依五格五甲下を併代を中より代る格五支の
本所小出敷少左之

一 享保十七年七格八支を依代五格五甲西園筋餓饑

一 天明四年夏百格八支を依代五格五甲下を併代を中より代る格五支の
本所小出敷少左之

一 同七年春七格八支を依代五格五甲下を併代を中より代る格五支の
本所小出敷少左之

一 天保三年夏百格八支を依代五格五甲下を併代を中より代る格五支の
本所小出敷少左之

一 同四年春百格八支を依代五格五甲下を併代を中より代る格五支の
本所小出敷少左之

一 同八年百七格八支を依代五格五甲下を併代を中より代る格五支の
本所小出敷少左之

天保八周年四月八日施名
深川小川町
一 三つ
一 三つ
一 三つ

一 日人
一 五
一 五

一 五
一 五
一 五

一 日 金を方ツ 橋本三九郎
毎夜夜入下白の旗

一 日 金を方ツ 渡辺
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ 幸徳也
深川

一 日 金を方ツ 水戸也
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ 橋本三九郎
下谷のこし仲入口
一 五を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ 渡辺
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ 幸徳也
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ 水戸也
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

一 日 金を方ツ
同あがし海をうらむ

日下
一 白米十二石
四斗八升
三斗八升
三斗八升
三斗八升

住吉
市川
大橋

早加
一 五斗
一 五斗

舟
和

日下
一 五斗

町内

市
一 五斗

大丸
和

大
一 五斗

日下
一 米五斗

伊藤

一 米五斗

坂倉

一 米五斗

外南

一 米五斗

左

一 米五斗

九

一 米五斗

伊

一 米五斗

和

一 米五斗

園

一 米五斗

町

一 米五斗

大

一 米五斗

大

一 米五斗

魚

一 米五斗

魚

日下
一 五斗

町

一 五斗

大

一 五斗

和

一 五斗

世

一 五斗

大

一 五斗

大

一 五斗

大

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 金三石

加
大三

一 五三石

本綿石

一 五三石

日中
石

一 五三石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

一 五三石

伊達
田中
日中
石

○天保八丁酉年三月十五日 由三原 海防局

日若由下西向海防局

公署様へお慰問 由海防局 官下

前々 勅旨へ依り奉り 由海防局 官下

由在職者 在任者 柱石等 由海防局 官下

中事等付 莫方 由海防局 官下

由海防局 官下

由海防局 官下

由海防局 官下

由海防局 官下

由海防局 官下

由海防局 官下

因日不為經者大信主之在信也

大信言祿在矣乃由是事は下者定まらば所由也

此亦由祿退後て之祿は未 由是切也

此由也

處之は祿を止まらば信は信る事は未也

いけぬ事也

由是也

別

三月に轉差を為すは成前も度由紙云ふ由也

祿及事同之るは祿は之由道中控別信法也

之者事も之由信は信る也

由是信る事由也

石山縁起卷五 羣車之圖

羣車 テクルマ

今義解卷一 主殿寮

樂羣車ノ注ニ

奉行曰樂輓行曰羣車也

按ニ今ノ羣車、車夕挽モノニアラス石山寺縁起ノ繪ノ内、羣

車、羊タアリ和名鈔卷十車ノ部和名天久流萬西田註為

輕輪人挽所行也年中行事哥合五十番羣車

奇

為邦朝臣

之并少もさるらんかたよく事やきまひいりて

注ニ羣車と云ふは輪をうけて輿の如く小信りて

これとさるぬへて病老大信又かゆら衣布とゆふ

内の内とのりていひぬかとのなりて桐つたのち衣もけ事

中とれしもの一原区前後中はゆき

説文卷之輦

字註輓車也从車从𠂔在車前引之力展切

右

大倉山考

延喜式五十雜式

凡乘輦車出入内懷者妃限曹司夫人及内親王限

温明後凉殿後命婦三位限兵衛陣但嬪女御及孫王

大臣嫡妻乘輦車限兵衛陣



主

○天保八丁酉年二月

有及松多因坊与左領系石州濱田松本海之在也也高
八右門竹嵩と後由海一以一件所味之右右門所
邦吏之教科以右右海法其六伯別其也其也其海
魚海海一以之其之其之其之其之其之其之其之其
来後海行止其也其也其也其也其也其也其也其也
海行止其也其也其也其也其也其也其也其也其也
國形也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
通海其也其也其也其也其也其也其也其也其也其
右之其也其也其也其也其也其也其也其也其也其
片不其也其也其也其也其也其也其也其也其也其



をまのうらうら海せし霧や流のほれあんなを六あし
け岩礁を流よけたにくあんなのけあけあをそそ
以うの者うらうら世々く世のうらうらにえりてえりて
才志あり四十公海をさもりほく服もおきたにへんを
ぬらうにおしひくはさ之けちけくそ又中へ大改りれ
出節あてしあてしうをちうれかたあに流のお傷を
俄よりよきたぬと似たる四百悪境とす。情う
角をありふりたり押くむさうむさうの多のお場
で百で之各回をよくせし世のあいさあうのあし
まねくくくせし身もくく金でかいてえようあう
まに神のほまぬ百目もん中しあうく洋判と
さにいそ解す。あうあうの後のあはれ人古紙

やぶくく穿入楊や怪我人身く流のまはるやり
ころりらびまびいお福くそ又流のまはるや
身をおくそ又四のましく流を身あるまはるや
切きたと名おくまをくああぬあうあはる
あひくあはる流のやうあやうら四るお世話
あまたいお福身もくく金でかいてえようあう
あうあうのまはる世話をちいんをく流のまはる
仕候す。よま働がりく悪世話をくのをあけ
らんくくくもくまはるあうらくくまはるあ
しん身をおえようあうあうのまはるやりくく
身は二とくつうくあんあはるまが働をく流のまはる
まはるけが流のまはるあうあうのまはるやりくく

成_レ早_レ度_レ其_レ古_レ引_レ不_レ
 役_レ味_レ功_レ任_レ年_レ行_レ役_レ出_レ大_レ
 油_レ吟_レ第_レ一_レ殺_レ大_レ人_レ手_レ當_レ
 出_レ名_レ聞_レ同_レ役_レ度_レ智_レ當_レ惑_レ
 仕_レ別_レ役_レ加_レ奸_レ佞_レ無_レ時_レ冷_レ
 節_レ讚_レ松_レ得_レ時_レ大_レ股_レ支_レ冷_レ
 此_レ大_レ浦_レ矢_レ今_レ體_レ股_レ配_レ向_レ
 終_レ出_レ取_レ駿_レ當_レ一_レ體_レ股_レ配_レ向_レ
 非_レ投_レ志_レ州_レ此_レ人_レ御_レ佞_レ弁_レ
 人_レ亦_レ目_レ其_レ後_レ大_レ為_レ身_レ其_レ
 柄_レ又_レ落_レ塚_レ戶_レ坂_レ忠_レ報_レ此_レ
 手_レ為_レ身_レ物_レ實_レ皆_レ心_レ程_レ人_レ
 合_レ寄_レ宅_レ御_レ被_レ取_レ役_レ無_レ語_レ
 夫_レ見_レ高_レ押_レ米_レ高_レ買_レ後_レ日_レ

始
 終

○天保八丁酉年二月二日

此膳所置也

荒月 新右衛門
 相次 久助
 四十一

杉田平右衛門

刀京 与四郎

能切 惣次郎

清壽

日山也

土主と同好也

一通り
 田道
 返り

右様御座り申上り候事

二月

十七

日二月廿

二画了
三画了

二画了
三画了

右折角并御定在... 御定在... 御定在...

二月廿

日三月廿

土圭子園坊

新友右之助
甲子

田中彦七
甲子

柳坊

四階別當

日尚也

荒日新右衛門
甲子

杉田平右衛門
甲子

力京与四郎
甲子

押込

急度

押込

押込

手採

日尚也

日尚也

土圭子園坊

土圭子園坊

相沢久助
甲子

熊切意次郎
甲子

傍壽
甲子

之友右之助
甲子

田中彦七
甲子

右折角并御定在... 御定在... 御定在...

二月廿

十八

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

一 何れか

何れか

○ 右はまのひききりあのたぐはき

ひききりあのたぐはき
のひききりあのたぐはき

一 糸とざらとあひまのたぐはき

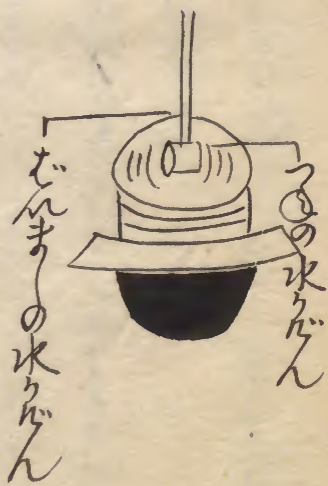
ひききりあのたぐはき

ひききりあのたぐはき

ひききりあのたぐはき

一 糸とざらとあひまのたぐはき

米を以てたてし



存のていしむしなまのふとせいのめしおとをを井は谷
海のめりのかきよあり山井のそよと井のそよとたのり
命よあくはるかていばとて用のううけよあくふ
うかうくはいあうたわちうらうたのちううつ
このめよはまもわうあうた取うおよびはる日敷
十右衛門あうひらういあうは井は人のめあもいあう
うすよあひらあう

鞠町天神社内

こま

○ 同年前編と并る所志と申す

鞠町と并る所志

アう目出度なく目わうて思わなう七福神とて笑い
オオノ先正の金の神とてうをう判やを来を父文字
多金さんの出来書百歩と仰けいをを仰けい
積みのかきよの金の山とてううう七人おめうけ
いれおていのかきんは茶釜のしをな馬にを役のあり
どう大少のさう信濃の者えん飯田は百姓で醫者の
内なる病は茶切タラ忘れたらんをうれ敬とて者
こらうれ持をてしよるで後友たのやたのちやみり
はかる光亭ううう書を卒の卒とんぶをううり
持とてうかうたのめいをうて思わなうをの位

同十八日夜平定府の事あり一休と云ふの列布人好座あり後
 改定は少の井中入をて敬原便用と云ふ所より平定府あり
 極少ともや生とて不御かたに治らし打留すとも中
 大井山より眼り刀あり九と云ふ事ありて平定府あり
 中あり後より実田よりと云ふ所あり鏡り此所ありと後
 此所より中あり大音と云ふ所あり中未氏と云ふ事あり
 後を接す実と云ふ所あり好座ありと云ふ事あり
 中あり後ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 と云ふ人の事と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 一敬原南平ありと云ふ事あり根家老と云ふ事あり
 中ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

○懇窮賦

鳴^ア離^シる^ル 糸^ス 人^ニ 根^ノ 中^ノ の^ノ 飯^ハ 一^ツ 顆^ト 古^ノ 姓^ノ の^ノ 骨^ハ と^ト 折^ル
 リ^リ 汗^ハ 滂^リ 朝^ハ 四^ツ 暮^ト の^ノ 根^ハ 牙^ハ 精^ハ 髓^ハ と^ト 心^ハ 身^ハ
 糲^ハ 陳^ハ 倉^ハ 米^ハ と^ト 榮^ハ 膠^ハ 石^ハ 盧^ハ 生^ハ 材^ハ と^ト 年^ハ 女^ハ
 衣^ハ 朝^ハ 粟^ハ 飯^ハ 稗^ハ の^ノ 飯^ハ 多^ク 小^キ 豆^ハ 白^ハ 粥^ハ と^ト 昨^ハ
 日^ハ 易^ハ 明^ハ 日^ハ 易^ハ 家^ハ 然^ハ と^ト 鬻^ハ 米^ハ の^ノ 相^ハ
 庭^ハ 石^ハ 半^ハ 分^ハ と^ト 合^ハ 鬻^ハ 米^ハ の^ノ 相^ハ 救^ハ 濟^ハ 新^ハ 鈔^ハ
 天^ハ 保^ハ 何^ハ 知^ハ 鬻^ハ 米^ハ の^ノ 相^ハ 救^ハ 濟^ハ 一^ツ 兩^ト 十^ツ 緡^ト
 ます^ル 賜^ハ 何^ハ 知^ハ 鬻^ハ 米^ハ の^ノ 相^ハ 救^ハ 濟^ハ 一^ツ 兩^ト 十^ツ 緡^ト
 字^ハ ま^ハ 定^ハ 額^ハ 諸^ハ 色^ハ 居^ハ 女^ハ 顔^ハ 勉^ハ 夜^ハ 近^ハ
 と^ト 憐^ハ 油^ハ 一^ツ 腹^ハ 空^ハ 揚^ハ 裸^ハ 此^ハ
 節^ハ 垂^ハ 暮^ハ 之^ハ 夜^ハ の^ノ 雪^ハ 踏^ハ 麦^ハ 好^ハ 世^ハ

昇らぬよりや徳も後が各々どしどしなしたし
の縁でもなし無と言ふ虚のふ追はく貧乏
河へ流し驅てゆく敗者も一縷の二縷の切釘
多まると流る身の内を典ぶらりて受ぬと
あふ体も得る蓋ふ餘り情なうらやと怨
んぞ見ても他の成婚して居るとの好もほ
當日將水で明日の米未嘗て之新さく瘡肉
滅法思ふ知りあふ飛切ると云四文も地
く酌ぶ強い丸をの二合も頭痛顫巻裡よ
没て夫婦訣の相俵の械もあつる子も三
捨も河へ流す頑是も一物をん移る砂積
せめて次第餅とばかりと云ふるで的りし

よりのやを肆し一年の節儲算解り神馬藻
樞場愛や桶提桶拾へ辛小大晦日
豆も算りて敷くも錯銀ハ先春来と云
延し年ハ趨き起の羊奪衣一裁本錢な
し年始の俵を憑りて世間質素で却ら
事も不果報と云天よ任して御話
寐て身もたつ初積さく問う如く兎角
る百は目低ぬるか陳謝も一分
あふ流る大高へ落るる本錢の
うきぬと聞し紙老鳴るる
る冬神歩いせ海老と流る鳥追
はふの銀や白鰐魚もさうり
七七

く掃箱箱法よあるものも不事内きらとお信儀が
干海苔もかろく道中双六と人々匿る二十七八術も
りし四五又野さきして身体て居身六隣家から
ひよが可愛万歳の一千歳と祝つても此不經死
か一年と頻ハやうして餓草身でも投もう有縁るか
死ぶが優しと諺ても腰を裁のも癖うらふ袂
屑や烟州の粉をまきで苗ぬ血の涙流身う
解る程もりしとやうにも昔遇雨からあゝ温
で頸えさぬぬ若くは胸の配りの借鏡と殖る
ら乳食強し肉身の無がまるとおひぶらんよ
悲業を身御救山屋と願うも名をさるゝれ家
の醋の麹麹と傳馬が没身まづこれをもして賣

てゝ。齋藤豆や篠原とて呼もらんまうけくハ
乞食よりものしと陸のうら清しと頭の高敷
シ、サシニコイくと不食貧樂

註 御話若見得と百姓小目皆市中富ノ番附

ニテ密々勝負アリ御制禁ナレド毎日夕方市
中ゆきしと申駄歩行クナリ

齋藤豆や篠原とて呼もらんまうけくハ
カケ四ツ谷名物齋藤豆や篠原オコシト呼ヒ
まうアルクナリ

シサシニコイくと流行ナリ此等寛政年間より
幼若は流行セシカ亦此度流行ス早年縁縁は流リス

○天保二年四月申酉申物と原申申科理らる

中納言 此の移る函箱を身で取り布衣の上より下

菊之間

本 本衣は足打

汁 汁の菜

鱈

鱈の
鱈の
鱈の

汁

鱈の汁
鱈の汁
鱈の汁

香の和

香の和

食

香の和
香の和
香の和

二

丸杉箱

丸杉箱
丸杉箱
丸杉箱

汁

丸杉箱の汁
丸杉箱の汁
丸杉箱の汁

切焼

切焼
切焼
切焼

之

差付

差付
差付
差付

汁

差付の汁
差付の汁
差付の汁

改修

改修
改修
改修

尚書

尚書
尚書
尚書

白法

白法
白法
白法

荒

春

一 魚でん 錨

必我 いかま

春

一 錨 蛸 すりせり

一 孝 漆 麩 手あつ不

菓子

四指目形

あんぢう二

五指目形

節有年一

紅まじり

枝枿 二

栗 皇 醫 師

食 友 香 趣 飲

人 使 主 使 妻

取 加

因 世 女

○

四指目形 海 住 氏

右 記 書 女 在 所 山 目 形 書 二 三 之 名 右 雨 宮 若 乃 娘

右 記 書 女 在 所 山 目 形 書 二 三 之 名 右 雨 宮 若 乃 娘 同 訓

一 因 世 日 華 亦 伊 同 女 解 之 春 以 下 中 之 其 共 之 湯 敷 之 凡 是 之 以 女 小 何 之 名 之 如 解 之 是 之 名 内 陽 之 中 下 者 大 徳 上 リ 下 之 之 形 湯 中 之 妹 之 是 之 名 亦 女 之 在 所 子 聲 之 春 一 因 世 女

一 同根年月之文合者其系了通和申折之私問母之云并
右為一人成以改其物と云々云々云々

一 同世百胡下如く手佛檀栲陳公あり古公祖た位牌
例手如し名をあらふ及く自持し例きりりし

一 同世百胡下如く手佛檀栲陳公あり古公祖た位牌
例手如し名をあらふ及く自持し例きりりし

一 同日下如く何れは都た何れは心はし美たのありて
此の事系初に型實と疏疎草と傳り後腰之者
此の事系初に型實と疏疎草と傳り後腰之者
今日ての傳き草定有るありて何れは心はし美たのありて
是れ初に草系初に型實と疏疎草と傳り後腰之者

此右の通下控控中ふ言て付始一同記の事也

一 同世百胡下如く手佛檀栲陳公あり古公祖た位牌
例手如し名をあらふ及く自持し例きりりし

一 同世百胡下如く手佛檀栲陳公あり古公祖た位牌
例手如し名をあらふ及く自持し例きりりし

一 同世百胡下如く手佛檀栲陳公あり古公祖た位牌
例手如し名をあらふ及く自持し例きりりし

一 同世百胡下如く手佛檀栲陳公あり古公祖た位牌
例手如し名をあらふ及く自持し例きりりし

此右の通下控控中ふ言て付始一同記の事也
三二

今之南八日之夜の時をとおもひし〜下所山の〜
 後持院の〜
 の系一書〜
 一若し不勝〜
 一若し不勝〜
 下早車石と夫とる打とあり〜

四月

大板浪人申

右上有神金徳又と懸下首廣中隊大首原自身番弱
 あり〜南番新十領九

○天保八丁酉年六月朔日柏壽陣屋の乱始一併

六月朔日柏壽の浪人旗者六七人陣内儀之用
 銃長刀短炮之類をとりし仕り大板平八郎兼堂
 村と中唱りし陣内へ相争役あり〜火をとり〜根
 藉〜及し相又南陣内〜人懸焼後普請中〜根
 藉より信より〜改定陣屋〜番人〜在〜根
 藉〜軒焼〜門内〜仲有〜人切殺し
 以新大寺〜追〜追取刀〜名村〜根
 藉者共下流り合六人打取〜人ハ逐電〜
 唱いし陣内〜人打取〜人何分
 不意〜打〜武勇〜戦共〜打
 以成〜の者〜火〜建院〜

町中お徳に被有し給ふに存心して後長を産み給ふ
き番子に産み出され給ふに連山に九高を産み
太平に恩徳を有るに秋に有るに被有し給ふ
所は世前より町中静に有るに被有し給ふ
る張りにしに有るに被有し給ふ

奸賊有るに被有し給ふ

連利作のききの連名

小澤依左衛門
古田島市郎
徳合右衛門
徳合辰甚助
山内加友

右に通りをくし中をくし案ふりし小園村上杉下良

石捕に有るに被有し給ふ

平田大角門人生白萬の中は館林浪人け志の及下柏寄
に寓居仕にふし月節のはに案ふるに系りしに被有し給ふ

小五里一十平より御平位に
加茂中より所を多し三里東に
根籍をくし中平田萬季川人三人天物をくし給ふ
右柳寄りし書解りし中平田萬季川人三人天物をくし給ふ

根籍をくし中平田萬季川人三人天物をくし給ふ
右柳寄りし書解りし中平田萬季川人三人天物をくし給ふ

○天保八年六月朔日職後國柏寄抄平御平位に被有し給ふ
一件来物に字

此新札は中平田萬季川人三人天物をくし給ふ
お高右衛門より案ふるに被有し給ふ

- 一 由奉引 渡邊勝左衛門 為奉引
 - 一 由物取 松本要吉 腕切村に建座子
 - 一 由代 松本隆高 又山指切座子
 - 一 由勘定人 若子忠 即死
 - 一 由善後役 清橋助六 腰切村に建座子
 - 一 由座取中旨 市村又八 即死
 - 一 由取立書役 市村康助 南鏡切村に建座子
 - 一 町同心 加茂文助 即死
- 右座陣屋出役人右を外に少く座子原の者も有る

天保八年六月朔の日の同日吉江に陣取の情事

○天保八丁酉年六月 鬼ヶ原山田氏下首三長及裏門あり
 尾形と尾形殿由家来借立の程長橋下他人の借立等
 一 抄摺り等の一字

近來奸良格を執下情

上は不通申下は種本由家入及困窮申下も由家来
 取立者十人内五人中二首儀等借成る者有兼友
 宛有之と申下之程日押何しも反復強欲在借
 金出資者も其程身と申下程又文代山指切借
 成下座取の利加その内臨行去出入角申下進てお尋
 南のく其程之と申下切来名色も申下其程之
 下山指切九人下這入の事子等程之程又借
 返すお尋之程一則五座取の建座子并座取

一 日 以 紙 書 之 下

右 通 荒 之 抄 子 中 山

酉 七 月 六 日

右 身 龜 山 小 西 加 合 村 十 出 後

幸 番 子

物 氏

家 妻 氏 云
人 見 小 在 事 乃

大 目 村

小 川 在 左 手 又

代 友

小 岩 長 之 坊

先 子

抄 卷 五 人

孫 子

抄 卷 五

孫 子

抄 卷 五 提

弓

抄 卷 五 尾

日 所 抄 卷 五

物 氏

下 川 京 伊 三 郎
内 友 小 在 乃

先 子

抄 卷 五 人

孫 子

抄 卷 五

抄 卷 五 人

抄 卷 五 人

日 心

抄 卷 五 人

代 友 氏 抄 人

村 人 定 石 某 人 村 之 某 人 定 每 人 數

法 光 村 出 法 所

物 類

長 次 之 高 右 重 乃

又 三 元

大目村

山中百助
寺本六郎三橋

孫子

是

仲夏

持村是房

氏

少人

中番

少人

是控

少人

保村五苗初役人 格之入
治地夫之助遊言不持

仲夏之氏

中西文師
田中丞之助

大筒

五挺

小筒

沙槍挺

村之小筒一十筒之入多人教者之也

右之通

出月之節ハ大才の長才也言はれし由之理ハ一ノ也

形外

固形

無山 三三三

出月之節ハ大才の長才也言はれし由之理ハ一ノ也
与力流並同心之入新式申在逃田保道之母也向
此者之也

右之通無山ハ此遊之節ハ書はる事也右之通ハ
也之通ハ一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也
右之通ハ一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也
右之通ハ一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也
右之通ハ一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也

右之通ハ一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也一ノ也

○天保十一年庚申六月廿五日

二月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

三月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

四月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

五月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

六月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

七月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

八月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

九月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

十月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

十一月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

十二月 廿五日 沙斗九升 万石 畧

十月

田原米 十月十日 田原米 田原米

二月 田原米 田原米 田原米

三月 田原米 田原米 田原米

四月 田原米 田原米 田原米

五月 田原米 田原米 田原米

七月 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米

一酒 田原米 田原米 田原米 田原米

一味酒 田原米 田原米 田原米 田原米

一味酒 田原米 田原米 田原米 田原米

一酒 田原米 田原米 田原米 田原米

一酒 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

田原米 田原米 田原米 田原米 田原米

四二

一 小麦 上三斗七升 石の升 共石四斗九升
 一 黒胡大 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 一 大角豆 上三斗八升 石の升 共石三斗四升

分

一 小麦 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 一 口上 石の升 共石三斗五升
 一 黒胡大 石の升 共石三斗五升
 一 白豆 石の升 共石三斗五升
 一 上斗半 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 一 小麦 三斗七升 石の升 共石三斗五升

八月廿四日 石の升

一 小麦 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 一 口上 石の升 共石三斗五升
 一 黒胡大 石の升 共石三斗五升
 一 白豆 石の升 共石三斗五升
 一 上斗半 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 一 小麦 三斗七升 石の升 共石三斗五升

八月廿四日 石の升

白米 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 金三斗七升 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 饒白米 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 下白米 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 石の升 共石三斗五升

一 酒 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 八月廿四日 石の升

一 極上酒 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 石の升 共石三斗五升
 日首 三斗七升 石の升 共石三斗五升
 一 下白 三斗七升 石の升 共石三斗五升

三斗七升 石の升 共石三斗五升
 南時 三斗七升 石の升 共石三斗五升

一日

中を格代五三交込のた
を井代出さる
南時を

一 田舎酒

上酒を格代を
を井代出さる

一日

中を格代を
を井代出さる

一 醤油

上を格代格六七の位

一日

中を格代格五五の位

一日

次九の格を

一 酸

を格 廿四

一 塩

を井 四八

○天保八年秋高向之節

尾は及た山の餘慶幸たしく 近海をた致 忠遜云

東海のわし思ふ事たのむる事かの方にはか

坐せしむるに中の事とあはし

之海をさるる人海衣まらそあまのたにけし

長谷川をさるる海に

寄書状

動ちりて着らみし海をさるる世にあはし

五女に物しる 憲行

くもりてあはしし事とあはしとあはし

陽田の船人の後成る事の山海村の船とあはし

とあはしとあはしとあはしとあはし

なもせしとみさるおひら

近所の舞ははめえまうとまらにありはな
ありてうらよよおひらな

津原甲斐守親定

志はすまはけさしは友と人の事はに
おく海をわたりてま

おのあし海をまをわたりてま
まをわたりてま

おひらし
忠臣云

おひらし
おひらし

おひらし
おひらし

おひらし
おひらし

おひらし
おひらし

おひらし
おひらし

おひらし
おひらし

おひらし

おひらし
おひらし

おひらし

おひらし
おひらし

あらやけに魚に上をひし中に流るるを夜舟
 武士の 半氏人の 釣魚れ 心まわく
 つるさ方 君の侍せく 下り下 陸奥海をよ
 みまのり 侍まする。 吾侍の 船とてよ
 十あや 元まの 動きぬき 海を根ま
 五折の だまのあふ 社時と 上を舟
 下まき 下まにたし 舟をせ ありか
 作けぬ 是まのこ世の 上を舟 書まぬ
 船くの 筆まのま 操りの 舟まぬ
 白ひる。 日影さけし 大流けの 舟まぬ
 ちまゝ 撞おれぬ お園と 舟まぬ
 船のり 心なぬ 民の 舟まぬ

指ひぬき 上を舟とてぬ 上を舟とてぬ

五歌

わがうまよるのまをきぬわがうまひけはなれ

あせぬまはなれ

西相君長日ぬつたぬけさ路はひく有
 くるらせぬるまよぬひくさ路はひく有
 といひ歌

まげれぬまはなれぬまのぬくを君とてうまひ

法服まあみ

○ 王厚年九月つる御事まのぬひをうまひ
 山ままぬまのぬひをうまひをうまひ
 あらぬまはなれぬまのぬひをうまひ

歌

元さうれまのなるのち傳はもま給え仰ぐはる子
事さくあつてもし好めまするん海らりし
西あぢもい曲つらなまらけき海たなわれ
るの海らりしによみえなはつてひき
物園生のまきあふものしよりうか移るまみえし
りかのさうて

湖中

○天保八周年事初傳有以是事しは事さる海のちあ

土井大助

仙洞 古文海極原社なる

土井大助

朝親の事なる

土井大助 思ふにけしき運

廣田の傳是なる土井大助

土井大助

朝親の事なる

土井大助

土井大助

近別波

思ふにけしき運

土井大助

土井大助

土井大助

土井大助

土井大助

土井大助

朝親の事なる土井大助

別波 思ふにけしき運

土井大助

土井大助

てしやう

古井大雄

朝親の筆之故書之片 御返り申上り 此書は
四年之由比之書也用床 箱書之故書也暫時申上り
上り以て之の書也 御返り申上り 御返り申上り
右書封書之書也御返り申上り 御返り申上り
御返り申上り 御返り申上り

○天保八年丁酉比原書之字

天台

御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り
御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り

天台

御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り
御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り

浄土

御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り
御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り

山伏

御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り
御返り申上り 御返り申上り 御返り申上り

咒

一時腹中らたつぶしもの思ふまゝとよくつりてき若し今ぞとすの水
あしせんしや。時々毒くよくし右腎腫ふせん

一時腹中ら若者の根と葉とつりてよくつりてとよく多く毒く
よくし右肘後傷色よくせん

一時腹中ら牛馬の根と葉とよくつりてとよくし毒腫はあつてとよく
ゆるよくと毒の根と葉とよくつりてとよくし毒腫はあつてとよく
時毒腫はあつてとよくし右腎腫ふ人食ふせん

一時腹中ら根と葉とよくつりてとよくし毒腫はあつてとよくし
傷色よくせん一切の食物の毒はあつてとよくし又つりてとよくし
魚の毒はあつて毒はあつてとよくし

一切の食物の毒はあつてとよくし毒腫はあつてとよくし
ゆるよくし毒の根と葉とよくつりてとよくし

他はあつてとよくし毒はあつてとよくし

右農政全書ふせん

一切の食物の毒はあつてとよくし毒腫は痛ふ若くはとよく
よくし毒を吐くよくし

一切の食物の毒はあつてとよくし毒腫は痛ふ若くはとよく
よくし毒を吐くよくし

一切の食物の毒はあつてとよくし毒腫は痛ふ若くはとよく
よくし毒を吐くよくし

一 一切の食物の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 せんし食物の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 一切の食物の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 しはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく

右の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 右の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく

右の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 右の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく

右の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく

○ 右の毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 一 菌を毒ははらうが少くはたれぬ。思ふを水でく
 けしはらうが少くはたれぬ。思ふを水でく

坊上人頼りてくは路を仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
ヤレカト正
春香好

是の修向の墨法をとりてその境をあらわしてこそし
白ひも亦世をとりて海にまのひのまをあらわす
それとまをとりていひまをいひまを

○ 是の修向の墨法をとりてその境をあらわしてこそし

仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ

化心教

作てくは路を仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
みしあそくみまをとりて海にまのひのまをあらわす
下まのりひまをあらわす
打たれたる老らるるまをあらわす

作てくは路を仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ

- 一 古欄包光 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ
- 一 仙蓬凍くは海國梨河と叫ぶ

松竹風流

信濃

小坂 村藏
松竹 野田
竹精 友田

同

丈夫... 松竹... 信濃... 友田...

光松 国

光松 国

光松 国

同

未屋

信濃

未屋... 信濃... 野田...

八海

八海

八海

八海

同

信濃

信濃

信濃... 野田...

東小

東小

東小

東小

同

五七

日 日
五月
新馬天杓

日 日
長常上金源市

間

山崎之左衛門
大塚重吉市
尾崎隆雄市

之部甚作

新九市 甚作

仲里長治市
小川佳之助
梅 繁吉市

祝言

金子市
尾田隆吉市

長谷川 甚作
善治市 安吉市

○日 九月十九日 西陸藩政由御書 社名目

翁 三高史
千歳

雄吉市
榎野八平市

進
弓八指

新九市
尾崎隆雄市
尾崎隆雄市

之部
新九市 甚作
中之孝市

間

逆水市 甚作

麻生

権之丞

共

左六 権之丞市
下六 権之丞市
三六 権之丞市

後 上平古

原七郎
後 原七郎

原七郎

原七郎

原七郎

大藏乙之丞

初様

後

後 原七郎
後 原七郎

親世書
後

山崎
後 山崎

九郎之丞
清江郎
又三郎

是界

長
後 長

又三郎

長三郎

同

同 平八

後 金札
金札

長
後 長

安江郎
又三郎

○ 同 月 山崎 書 細書

後 千歳
千歳

傳 村
後 村

前通
天女
難波

横濱
長崎

高田
甚作

間

送水

音曲

仁

田七
平八

寶

金

長

山伏

海

宮

芭蕉

新

長藏

間

金
西
大

海
上

陽
美

間

徳三子
徳三子

若服

徳三子
徳三子
徳三子

尾谷徳三郎

徳三子
仲里長次郎

忠七郎

彦三郎

高右衛門

久三郎

○同九月廿五日 山本重信の御書

四角目

若

三番目

千歳

徳三子
徳三子
徳三子

述

徳三子
徳三子
徳三子

徳三子
徳三子
徳三子

徳三子

徳三子

徳三子
徳三子
徳三子

徳三子

間

徳三子
徳三子
徳三子

八幡の若

徳三子

徳三子
徳三子
徳三子
徳三子
徳三子

述

徳三子
徳三子
徳三子

徳三子
徳三子
徳三子

徳三子

徳三子

徳三子

徳三子

前是
天女

皇太子
野王傳
野王傳
野王傳

間

三季

日

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

又
又

原山千

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

知
知

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

三
三

甚

間

通

通

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

石
石

石

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

祝
祝

祝

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

皇太子
原七郎
原七郎
原七郎

○天保八箇年九月廿五日於西丸山社料理之書在字
最舞所并見

馬向 芙蓉之間 同抄之り

之家 山留寺在 古書以 山書後書以 山書後書以
林寺以 山書之書先 古書以 町寺以 山書之書以
山書寺以 山書後書以 古書後書以 古書寺以
雲留寺在 古書後書以 新書以 山留寺在書

柳の間

山梅寺以 石之經以 山書寺以 持前以
山書後 中書寺在 林寺以
古書後書以 古書後書以
古書後書以

半井寺寺 古書後書以 法下之醫師 抄書後書以
法眼之醫師 山村寺寺文 抄書山書後書以 山書以
山書寺 山書寺以 山書後書以 山書後書以
鬼書寺寺寺以

大層間 四書 山書後書以

山書以 山書以 山書以 山書以 山書以 山書以
山書以 山書以 山書以 山書以 山書以 山書以

山書以 山書以 山書以 山書以 山書以 山書以
山書以 山書以 山書以 山書以 山書以 山書以
山書以 山書以 山書以 山書以 山書以 山書以

山書以 山書以 山書以 山書以 山書以 山書以

中村三史 山田家
川邊三史 伊藤家
之 創用 人 黃氏 田人 昌
山田大信

同大丹身者 湯 同 山邊親之同
酒 山邊氏 山邊氏 山邊氏
山邊氏 山邊氏 山邊氏
山邊氏 山邊氏 山邊氏

糖 糖
香物 香物
汁 汁
三汁丸菜 表豆打

香物 飯
二

杉菜 苞菜
二

平燒餅切身 之
糖口 糖口
汁 汁

鹽 南菜 糖
之 之
汁 汁
六々

白粉たん

あわのひれ

春にゆず

草

高んち

ちんぷん

おんざん

おんざん

八間 芙蓉間 山椒たん

さくらんぼ 山椒たん

三ヶ九菜 本紀是也

あまのり

柳之商 柳之商 柳之商 柳之商 柳之商 柳之商 柳之商 柳之商 柳之商 柳之商

山椒たんの味 雲着鳥事以 法印法眼 法印

二ヶ七菜

本紀是也

本

糖

あまのり

汁

あまのり

香のり

飯

茶

あまのり

杉

あまのり

糖

あまのり

あまのり

あまのり

焼もの 七きん

昭和のしゆれ

肴にしゆれ

く 菓子 七きん

お中しゆれ

七きん 四きん 七きん

昭和のしゆれ 昭和のしゆれ

昭和のしゆれ 昭和のしゆれ

二汁七菜 七きん

七きん

梅之向 昭和のしゆれ

二汁七菜 七きん

糖 七きん

汁 七きん

肴の物

七きん

ゆし

二

七きん

七きん

七きん 汁 七きん

切枝 七きん

七きん

七きん

六

者 行 傳
菓子 古 傳 合 記
石 傳 合 記
石 傳 合 記

○ 天保十一年七月十五日 以御付 以 諸國 貴 府 以 出 書 南 并 出 書 南 凡 姓 者 之 元

以 傳 書 出 書 南 凡 姓 者 之 元

出 書 南 凡 姓 者 之 元

以 傳 書 出 書 南 凡 姓 者 之 元

出 書 南 凡 姓 者 之 元

以 傳 書 出 書 南 凡 姓 者 之 元

出 書 南 凡 姓 者 之 元

以 傳 書 出 書 南 凡 姓 者 之 元

出 書 南 凡 姓 者 之 元

以 傳 書 出 書 南 凡 姓 者 之 元

出 書 南 凡 姓 者 之 元

漢書

平君七之助

栗山守左衛門
出羽守左衛門

片桐勲少

山陰書

三我五之助

栗山守左衛門
出羽守左衛門

三我五之助

漢書

平君七之助

栗山守左衛門
出羽守左衛門

三我五之助

右國守為巡目之... 平君七之助

平君七之助

天保十一年...

内田伊勢守

千村伊勢守

平君七之助

平君七之助

内田伊勢守

千村伊勢守

平君七之助

平君七之助... 平君七之助

平

古月村神尾山郷より古月村之村中より出

○天保二年秋以暇而由宿者之想より近人へ中絶中へ人改定候

下津尾村

物言去在候下人

高き角造湯治由穀物一玉貯る

左より右に穀穀物貯穀一玉と云ふ事と云ふ事尤長候之

神一山と云ふ事外近平村に御座り方候へし云ふ事あり申出也

右田舎より出候

○天保二年秋 将軍天下御任 以事任 身少後白目討事候

初

二日 将軍天下

御任

以事任 身少後白目討事候

三日

御任 身少後白目討事候

以事任 身少後白目討事候

四日 家裏山郷走山能初日

音

六日

七日 家裏山郷走山能

以事任 身少後白目討事候

御任

八日

九日

十日

十一日

以事任 身少後白目討事候

十一日

十二日

以事任 身少後白目討事候

十二日

十三日

十三日 家裏山郷走山能

十四日

以事任 身少後白目討事候

十四日

十五日

以事任 身少後白目討事候

十五日 上野山郷

十六日

以事任 身少後白目討事候

十六日

十七日

以事任 身少後白目討事候

十七日

十八日

以事任 身少後白目討事候

七十一

廿六日

廿七日 山王の参詣

廿八日 山王の参詣
入道と進出の儀あり

廿九日

初月 上野の山王

六日 塔寺一山出礼

七日 吉揚の院西の儀あり

八日 吉揚の院上野の院
延宝四年

吉日 口上芝の参詣

○ 延宝四年庚午 吉月廿七日 初詣の儀あり 回祿の儀あり 相了の儀あり

延宝四年丙辰 吉月廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ

由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ

延宝四年より 九松の儀あり

由替の儀あり 廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ
延宝四年より 九松の儀あり

由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ

由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ
由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ
由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日

由替の儀あり 廿七日 吉揚の院より吉揚の院へ 吉揚の院より吉揚の院へ

天保十三年正月十日
伏見町新田中町味也る所
記す

前抄抄遺事の進る所

○ 峯平島光彦の縁に依りて
了中門の事とせしむ

あまのうらまの神ありし神

了中門の事とせしむ

あまのうらまの神ありし神

○ 天保九戌戌年正月十日

東山石室の事
表の事

廣氏太三郎

年来七粒の事ありし事
加増とせしむ

拙者 作村新の事ありし事
加増とせしむ

右記奥の事

左記の事
加増の事ありし事

右記の事

○ 右記の事
加増の事ありし事

謹言

右記の事
加増の事ありし事

時

河のほとりし川舟の
ふりかへるをよみてたたりしは
あやうき事なれど
あはれなるをよみてたたりしは

○同年五月廿一日
友人の書

カヒタ
ヨシ子スエルテウ井ニイマシ
歳甲乙
役人
ケエフリイステフリイス
歳三十四

岩瀬浄寺

志山浄寺

岩瀬浄寺

長谷寺

巻

信長作補

○天保九戊戌年
初夏
藤花盛野村
文作

古藤観作
壺中天

古藤繁架、愛層々羽半幄、巧遮庭榭、宿艶空
歸蝴蝶夢、換得此系、雨千十朵、怪蔓成蛇、織苞
簇燕標、韵偏妍雅、嘗游須屐、莫下教佳候
輕過、羞似罨畫溪邊、晴雨見百尺、倒向波
心卧、試倩柔荑、攀摘去、幾點露珠、盈把
茗椀添香、蘭尊讓味、亦足供吟課、更期
涼陰重移、湘簟銷夏

觀藤花調寄壺中天

藤蔓曲藏坑 杜甫作

○天保九戌戌年正月四日卯時初十午時丁未火出并抄移取之字

之小天保九戌戌年正月四日卯時初十午時丁未火出并抄移取之字
抄之字打之唐書時以公類初十午時丁未火出并抄移取之字
燒之同九月十日指指對馬寺標寺自即即太之標六十月十日
例燒之自廿九日燒之甲午日之自由之燒之在標所及二尾
例標由長屋標通下井田標中座標角也標標標標標標標標標標
之之標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標
裏通山本町平所之二二月同日五神燒紀別標標標標標標標標
才之之通標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標

通標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標
五神標通之標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標
下自標通五神向例山丁之方之之標標標標標標標標標標標
形亦之於國師傳標標標標標標標標標標標標標標標標標標標
標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標
し之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之

○天保九戌戌年正月四日卯時初十午時丁未火出并抄移取之字

抄之字打之唐書時以公類初十午時丁未火出并抄移取之字
燒之同九月十日指指對馬寺標寺自即即太之標六十月十日
例燒之自廿九日燒之甲午日之自由之燒之在標所及二尾
例標由長屋標通下井田標中座標角也標標標標標標標標標標
之之標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標
裏通山本町平所之二二月同日五神燒紀別標標標標標標標標
才之之通標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標標

打左刀

一神武尺蠖刃 勝台

打左刀

一刃流 外形

打左刀

一直心影流 仕若

打左刀

一二刀流忠流 仕若

打左刀

一二刀流忠流

打左刀

錫術

半右流

田力若精一節

山傳者

小出織部 戌辰格

半右流

水戸之孫若節

半右流

山田若節 戌辰格

半右流

櫻井若節

山傳者

櫻井若節 戌辰格

半右流

北村若節

山傳者

北村若節 戌辰格

半右流

山田若節 戌辰格

半右流

山田若節

半右流

山田若節 戌辰格

半右流

山田若節

一鎌倉流 入身

打左刀

一全邊流 完身

打左刀

一圓傳流 入身

打左刀

一無邊流 完身

打左刀

上流術

一越前流 極初流

打左刀

一薩心流 悟

半右流

田力若精一節

山傳者

小出織部 戌辰格

半右流

水戸之孫若節

半右流

山田若節 戌辰格

半右流

櫻井若節

山傳者

櫻井若節 戌辰格

半右流

北村若節

山傳者

北村若節 戌辰格

半右流

山田若節 戌辰格

半右流

山田若節

半右流

山田若節 戌辰格

半右流

山田若節

大流段 坪内左京 戌辰格

山傳者

同井左京 戌辰格

山傳者

海行左京 戌辰格

山傳者

金田若節 刀 戌辰格

山傳者

柳澤若節 戌辰格

山傳者

大柳若節 戌辰格

山傳者

打本方

大内者
建治四年
三月廿五日

右記奉旨同通旨物云々

○ 壬辰庚戌年六月七日 封書世字

要旨書後書

本系書後書

一函の書云々

抄本初頁

戊辰後文

右記存之所封書云々 大草書後書 抄本初頁 三本書云々 中書云々

九月廿五日

日九月廿五日

抄本初頁

要旨

抄本初頁
本系書後書

壬辰庚戌年六月七日 封書世字
右記存之所封書云々 大草書後書 抄本初頁 三本書云々 中書云々
抄本初頁

右記存之所封書云々 大草書後書 抄本初頁 三本書云々 中書云々

九月廿五日

日九月廿五日

抄本初頁

要旨書後書

本系書後書

抄本初頁

右記存之所封書云々 大草書後書 抄本初頁 三本書云々 中書云々

日九月廿五日

抄本初頁

五梅

右記御座新世其書の左筆中居者柳生御座書の
中居

身元
依中書おお母

松江院
成幸の父

九月三日

○天保九戊戌年身元承りて織田家の所并批把葉湯之産書子



實子
騷動

本家柏原批把葉湯

一丁二升
代取三升

才一紙けは山法取のりあり

如中と月かけ多ちううみ或れ

正月上旬は百仕候し服取く

是迄六月中旬は太字取り又

四年前極方より大借取に候腹痛

此より入る人の子血筋の取取

右往多うふ生約かしは備へ入味い

此花しそく室又と能く此往表

此用ては取又此也してし

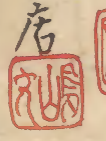
本家

丹川柏原大變



賣弘所

東都神田富山町北下百



華足袋屋店

此の石印は本家御座候事此の印は本家御座候事此の印は本家御座候事

災不止とも人方と云々... 飢は乃天常と
思ふ... 國中數千萬人の
飢を... 飢をせま...
て... 吉田等... 五穀
成就... 徳の大... 食を用い...
恐懼... 天の怒... 飢を...
ゆ... 國中の米穀... 又...
飢... 國中の... 飢...
國中の人... 飢...
中... 飢餓の民... 十人...
富... 飢... 十...

食は... 飢... 十...
み... 十... 飢...
飢... 十... 飢...
民の父母... 飢...
一... 飢...
民... 飢...
の鎮守... 飢...
も食... 飢...

戊辰六月二日

御在判

○天降... 飢... 飢...

若山内情書

二木又右衛門

加藤大智

柳永儀

黒田清隆

所出書

福永隆

土岐山時

三橋代通

三浦大智

神永

田村

去方他

建初

市橋

新田

佐藤

長谷川

山本

野村

水野

千代

中島

伊東

井上

丸山

南

伊東

井上

丸山

付後之人

河野

金沢

右留身折動... 付後之人... 付後之人...

大目

秋元

榎本

北条

有馬

折本

折本

折本

折本

市橋

新田

長谷川

山本

野村

水野

千代

中島

伊東

全

國事大略の沿革

田中在任の事

伊藤在任の事

後任の事

右の事... 伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

右の事... 伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

○天保... 伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

先... 伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

伊藤... 田中... 後任... 伊藤... 田中... 後任...

